



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

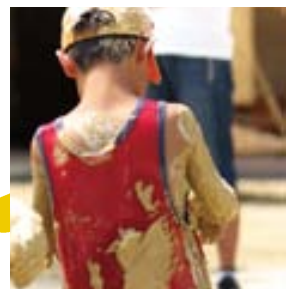
特集

## 子どもが輝くミュージアム

vol. **24** | 季刊 夏  
2012







好奇心いっぱい、怖いもの知らず。まだ見ぬ未来が詰まった子どもたち。そんな子どもたちと一緒にライブミュージアムができることは何だろう。五感を開いて、体と心をほぐして、自分で考えて、思うように取り組んでごらん。子どもたちが、楽しく創造性を発揮するミュージアムへこの夏、京都造形芸術大学とともに、一歩踏み出します。

## 子どもが輝くミュージアム

【特集】



イラスト=遠山 敦 写真=INAXライブミュージアム開催のワークショップ

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

## 01 〔特集〕子どもが輝くミュージアム

02 子どもとアートが、みんなをつなぐ。 水野哲雄さん

04 この夏、コラボレーション始まる。  
京都造形芸術大学+INAXライブミュージアム

### LIVE SCHEDULE

これからの催し

06 夏休み特別企画  
ワークショップ だるまの遊園地～子どもは遊びの天才だ～

企画展 ミントンのタイル 千変万化の彩り  
関連セミナー開催報告

07 企画展 岡モータース モーターショー in 常滑～無限の動力を夢見て～  
テラコッタ“スイーツ”ナイト  
フォトコンテスト2012 作品の募集  
光るだるま大会2012

### LIVE REPORT

開催報告

08 「建築陶器のはじまり館」オープン  
ゴールデンウィーク特別イベント みんなでシャボン玉を飛ばそう

09 INAXライブミュージアム+遠山敦 アートワークショップ  
ワークショップ 土と足で遊ぶアート体験 制作した作品の展示

## CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol.24 季刊 夏  
2012

表紙写真

テラコッタパークで出会ったお二人は、「美術館に行くのが趣味」。やきもののできた大きなテラコッタの迫力と装飾の美しさに感心しきりでした。新緑の息吹とともに楽しんでいただけたでしょうか。  
(2012.6.2)

撮影：加藤弘一

### 常滑から\*

23



腰壁に埋まる1本の土管



大きな屋根と藁の絡まる妻壁

## 街まるごとミュージアム

私は街を歩くのが好きです。特に自動車も通れない細い路地が好きです。屋根や壁や扉に使われている材料が、時代を経てなんとも言えない表情に変化している姿にしばれます。不思議な形をした物を発見したり、昔の人の知恵を感じたりすることも街歩きの魅力です。

常滑には私の触手をくすぐるものがたくさんあります。街がまるごとミュージアムと言えるかもしれません。直島や越後妻有の現代アート作品と見まがうような、スケールの大きいものにも出会います。藁の絡まる煙突や工場がまさにそれです。

土管や焼酎瓶が積まれた景色は、それはそれで魅力がありますが、便器が積まれていたり、急須の茶漉し部分を切り取った切りカスが積んであったりするのを見つけると、クスマと笑みがこぼれます。

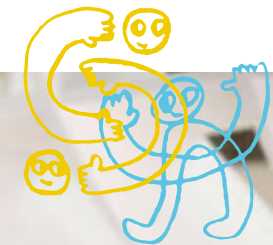
平安の末期から連続と続くものづくりの街には、何か地霊のようなものを感じます。

ライブミュージアムにお越しの折に、ぜひ常滑の街歩きをされてはいかがでしょうか。

磯村 司 (しんじろう)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。





子どもは、いちばん自然に近い「種」のようなもの。

太古の昔から、人間にとって、「芸術」は自然が教師。自然を感じて創造活動をしてきました。では「アート(Art)」とは何か。僕は出前授業に行くと、中学生にこう説明します。

Heartの中にArtの種がある。HeartがなければArtは生まれません。そしてHeartがつながっていくと(…Heart heart heart…) Earthが見えてくる。風、海、いろいろなものがいっぱいある地球は、確かにアーティスティック、

りたいというのが、いわゆる幼児教育とは違う、「子ども・アート・学び」をキーワードにした「子ども芸術学」をはじめた理由です。大学ではまず、学生たちの体の中にしみ込んでいる子どもの頃の記憶―五感を解きほぐすところからはじめます。ちょうど畑の土に鉄を入れて掘り起こすような身体感覚ですね。「身体知」という言葉がありますが、不思議なことに、身体が覚えている知性というものはあるんです。僕のワークショップは、アウトプットまで考えません。たとえば一枚のコピー用紙を使う。学生はすぐに「これで何するんですか?」と聞きます。「遊ぼう。何する?」と言うと、「エーッ!」と。ある目標のために行動することに慣れていて、ゴールが見えないものに対して臆病になっているんですね。

考えなくていいから、まずはいじる。そこから何ができるか考える。手ははじめに、紙を破らないようにシワにする。それを隣の人と交換してみると、肌触りが違うことを発見する。紙飛行機をつくりたいとか、音を出したいとか、破りたいとか、いろいろな意見が出て、じゃあ、リングの皮みたいなのに、誰が一番長くつなげて切れるかやってみよう、と。

大事なのは、「これをどうしよう」と工夫することなんです。五感がほぐされて、のってきたら、すごい発想が出てくる。面白いですよ。

MIZUNO Tetsuo  
1948年愛知県生まれ。京都工芸繊維大学大学院で視覚意匠工芸を学ぶ。京都芸術短期大学ビジュアルデザインコースの専任となり、映像コース、情報デザイン学科で教鞭をとる。その後、入試部長として芸術普及活動、美術教育に関心をもち、2007年から現職。子どもや子どもに関わる大人、教育者・保育者を芸術の観点からサポートしている。



気持ちが形と対話する



材料を触って“質”を感じる

汗をかいて何かをつくる喜び



「いま・ここ」という場所とのかかわりは 生きた時間と空間との対話

木の堅さや木目の方向、ナイフの通り方を確認する



写真=京都造形芸術大学子ども芸術学科主催のワークショップ

## 子どもとアートが、みんなをつなぐ。

### 水野哲雄

京都造形芸術大学 芸術学部子ども芸術学科長教授

こんなに美しい星はない…。子どもというのは、いちばん自然に近い「種」のようなものです。知識も経験もないけれど、物事をドングリ眼で受け止め、面白がる。一種のセンチティブなリーダーで、感性や物事の受け止め方を大人に気づかせてくれる貴重な存在です。子どもに学び、子どもが幸せになれる社会を考えることは、人類の未来をどう考えるかにつながります。

一方で、子どもは社会人として未熟な存在であるから、教育してルールやモラルを教えなければいけないといった、「子ども教育される対象」という考え方があります。たしかにそういう面はあるけれど、じゃあ今の大人社会はそんなに自慢できますか。非常に混乱していますよね。学生を見ていると、心が弱って、生きていることの意味や重さがわからなくなっている人が多い。

だからこそ、アートの原点である自然や、自然に最も近い子どもの力に学ぶことが大切になる。今、アートは生きる術なんです。生きるための技術だということが、改めて言われはじめていく気がします。

手を動かすことで 脳が刺激されて、気づく。

「絵なんて描けない」と大人は言いますが、ゼロ歳の赤ちゃんにクレヨンを持たせると、絵を描きますね。あるイメージをもって描いているわけではありません。頭が手を動かすのではなくて、手を動かすことで脳が刺激されて気づく。今までと違う回路をつくっていくわけですから、そういう、「芸術表現の根っこは何か」をさぐ

「美」が接着剤、「学び」と「遊び」をくっつける。

アートには大きく2つの方向があります。一つは、今までの芸術の価値を受け継ぎ、さらに進めていく、従来の美術館などのアートシーン。もう一つは、コミュニティをめざそうとするアートです。場づくり―人と人、人と物、人と自然物と物の関わり―の中で、生き生きとしたクリエイティブなものをどう生み出していくか。

具体的にコミュニティ・ミュージアムだなどと思ったのは保育園です。ゼミで月に一度、ある保育園に通っているんですが、地域のいろいろな人が交わる広場のようになっています。子どもの存在が、大人に影響を与えているんですね。ライブミュージアムがやろうとしていることは、それとつながっていると思います。そこへ行くと、新しい刺激があったり、人と出会ったり、ワクワクドキドキする。子どもは思うように自由に遊べばいい。大人にとっては、子どもに還れる場所。自分の内にある子ども性を時々はちゃんと感じる。それは、自然を感じることにつながります。親が楽しければ子どもも楽しい。精神的な空気が大事で、それをつくり出すのがミュージアムの役割じゃないかと思うんです。

「楽しいだけではだめ」と言われます。でも、楽しくなければ。楽しいなりに、スパイラル的に上がっていく「何か」があることが大切。それが学びのベクトルになっていく。「学び」と「遊び」を分けない。どちらにも「びび美」があるでしょ。美が接着剤になって学びと遊びをくっつける。そんなことにチャレンジしています。(5月8日収録)



まずは、常滑を知りたい！

**水野** では「常滑どろプロジェクト会議」をはじめます。

**神内** 私たち、先日、常滑を案内していただきましたが、面白い街ですね。商店の人、やきものに携わるクラフトマン、そしてLIXILで働く人、多様な人たちがいる。

**加藤** ざっくりばらんな感じがいいですね。新しいものと古いものが混在して、街が生きている。**辻** 常滑は六古窯の一つで、千年の歴史を持つやきものの街ですが、茶道の世界とは縁遠く生活雑器を中心につくってきた。だから、なんでもやってみようという好奇心は強いし、誰でもウェルカム。若い人も入って来やすい土地柄です。

**神内** 一見、雑然としているけど入ったら何かがある、それが常滑。映像の先生にも協力してもらいながら、事前に学生に街を見せたいですね。

**水野** ワークショップの大きなテーマは「土」ですが、企画づくりは、まず、街とのコミュニケーションが大前提です。ライブミュージアムが核になって、「土」と「子ども」と「常滑」をつないでいく、それをかたちにするアイデアが生まれたいですね。

人の心を解き放つ、「土」の力

**辻** はずせないのは「土」なんです。毎年夏休みに「みんなてどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう」というイベントをしています。3畳ほどのどろ田で、ただどろんこ遊びをしてもらうんで

立てにするとか…。

**磯村** 踊りますか？(笑)

**水野** ステージと音楽は欲しいね。

**磯村** 太さ、厚みの違う土管を並べればパーカッションができます。

**加藤** 土と子どもをキーワードにした、いろいろな企画がミュージアムのあちこちにあるのも楽しいですね。

**磯村** 泥を壁に向かって思いっきりぶつけてみますか？普段やれないことをやる。

**辻** もしかしたら子どもたちは、場所と素材だけ用意すれば、勝手に遊びはじめるかもしれない。汚してもいい場所に、紙と土、あとは好きなように遊んで。

**水野** それ、いいね。プリコラーージュのような発想。その中で、学生が自分たちのプランで何かをはじめれば、子どもたちも一緒にやりたいって入ってくるかもしれないし、黙々と一人で遊ぶ子どもいるかもしれない。とにかく子どもの自主性に任せてみる。

**加藤** 常滑の街で、遊びの素材を集めてくるのはどうですか。学生たちがリヤカー引いて素材探し。

**磯村** 常滑の場合は、乳母車なんです(笑)。**辻** 土、どろんこ館の企画展示室を、どろんこ天国にしましょう。いろいろな種類の土、紙、道具を置いて、子どもたちが工夫して何かをつくり出すという感じ。

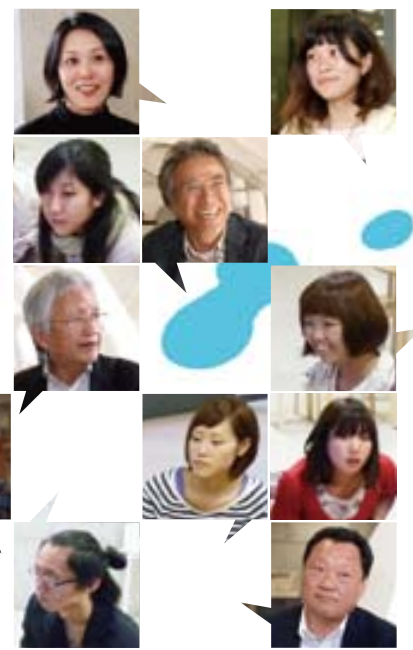
**水野** 外に出たいときは、レッドカーペットの上を歩いてもらう。どろんこスターミみたいな演出。広場には恒例のどろ田があって、他にも土にまつわるワークショップがあって、お父さんの出番もつくらないとね。土はいろいろな用意できそうですか。

この夏、コラボレーション始まる。

京都造形芸術大学 + INAXライブミュージアム

子どもたちに、もっと自由に、もっと楽しく「土」とふれあってもらいたい――。

INAXライブミュージアムは、水野哲雄教授を中心とする京都造形芸術大学の先生、学生とタッグを組んで、とびきりのどろんこワークショップを計画中。ある日の企画会議を、ちょっとのぞいてみました。

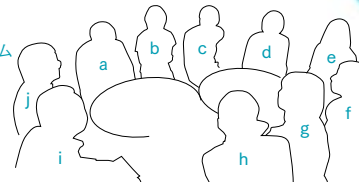


常滑どろプロジェクト会議に集まった人々

- 京都造形芸術大学 芸術学部チーム
- 水野 哲雄 <sup>a</sup> (こども芸術学科長教授)
- 神内 康年 <sup>c</sup> (美術工芸学科総合造形コース教授)
- 加藤 ゆみ <sup>b</sup> (NPO法人こどもアート代表)
- 学生たち <sup>d, e, f, g, h</sup>

INAXライブミュージアム

- 辻 孝二郎 <sup>j</sup> (館長)
- 磯村 司 <sup>i</sup> (ワークショップ担当)



**辻** はい。柔らかいものから固めの土まで。色もいろいろお任せください。**神内** 学生のアイデアも期待されているから、現地に入ったときイメージが膨らむように、常滑のこと、いろいろ調べてみてね。**辻・磯村** では、楽しみにお待ちしております！

子どもVS土 体当たりで土と遊ぼう

**水野** 子どもも大人も楽しめる、シンブルでエネルギーの出せるワークショップ。

**辻** 手足だけじゃなくて、もっと体全体を使ってダイナミックに。**学生** どろんこメイクでファッションショー仕

**辻** 日常でアンチなことが、子どもにとっても大人にとっても新鮮で、面白い…。そうかもしれませんね。**水野** お父さんを誘いたいね。**辻** お父さんは、どろ田になかなか入らないんですよ。一番ストレスを感じているから、解放してあげたいと思うけど、手こわいですよ(笑)。

**辻** やりたいんです。**水野** 学生としてはどうか、土って。

**学生** どろんこになったことがないんです。畑とか田植えとか縁がなくて。触れたら絶対楽しいと思う。水着じゃなくて服のままどろどろって、すごく懂れる。基本的に大人は「汚すな」「ぶつけるな」って言いますよね。ホントはそれが

ですが、これが大人気。今年の春には「土と足で遊ぶアート体験」のワークショップを開催しました。どちらも、子どもたちは泥まみれになって大喜び。そういう姿を見ると、土と遊ぶ体験というのは、子どもにとって何をもたらすのかなあって思っています。**辻** 土って、人の気持ちを楽にするんですよ。だからもっと土の可能性を掘り下げたいし、子どもたちに土とふれあう場を提供したい。いや、「子ども」と「土」という、なにか大きなムーブメントができないかと、夢見ているんです。